和田周二論のために

上 田 博

ただよへる微塵のゆらぎ 周二短歌の出発

和田周二の第一歌集『微粒』（昭三三・七）には昭和二三年から二九年に至る七年間の作品二七二首が選んで収められてあり、巻末には『微粒』以前」と題して、作歌を始めた昭和八年から二二年までの作二二二首が収められているのである。

事務をとる吾の臉に窓よりさす昼の光のちらつくまぶしさ
仕事をへて心むなしく見てあたれ洋服の袖の白きほこりを

周三の歌が「ポトナム」の小泉荃三先生の「選歌欄」にはじめて載ったのは、昭和八年五月号であった。京都市立第一商業学校を卒業した後、京都市役所の水道課の一下級官吏になった。周三は美術系の学校への進学を希望したが、祖父の許すところではなかったのである。昭和五年四月のことであった。

数字書きて生きて行くべきか四年間の安易さに居しは省みて堪へ難し（昭九）

の作があり、「数字書き」「事務をとる吾」の生活のくり返しに生きがい

を感じえない、みじめな自分の姿に感傷する心が歌われているのである。「昼の光」が窓にちらつく、その外光によって「洋服の袖の白きほこり」が目につくのである。それは、仕事を了えたという満足からはほど遠い感覚であつて、周二短歌の出発期の感情ベースには、不満足な日常への「心むなし」「い感じが」「白」の空しさとして表現されているのである。

ただよへる微塵のゆらぎ見つめつつひそかなる息を胸にして居り
なるがままに行かむ思ひを下持ちて己見つめ得ぬ日の多く過ぐ
地の底に人声たつを聞きあるに燥き白ける街路はてしなし
燈の沁みし眼まなこあぐれば街空の真近き間にはためく日の丸

小泉荃三先生が長野の女子専門学校から京都の大学へ転任して来られたのは昭和七年、翌八年に主宰する「ポトナム」誌上に「現実的新抒情主義短歌の提唱」を発表して、結社の指針としたのである。周三は荃三先生の講話を職場の「平安短歌会」で聞き、先生の歌論と人格に直接触れて、先生の弟子の一人に加えられたのである。

周二短歌は、対象に対する直接的、感覚的表現から象徴的表現に向かつて変化を始めたかに見られる。「ただよへる微塵のゆらぎ」には巷に吹く風に限定されないイメージの広がりを感じさせ、「ひそかなる息」を胸にする結句と照応して、自身の内部に感受されるある種の「微塵」

と表現される混濁した気分状を指示しているのである。より手触りのある表現は次歌に引いた「なるがままに」の歌に求められる。日常の時間が、社会の動向あるいは現在の自分に自己否定的に拘束されるのではなくて、情性に流されている自身を投げ出すような姿勢で描いているのである。しかし、そう自分を眺める目が「下持ちて己見つめ得ぬ日」であるとするところに情性一方に流れて行くことにもブレーキをかけていると見られるのである。微力ながらも一方向へ傾斜することに自覚的であるとする心理作用が何処から発生してくるかをばくりに感知させるのは後の二首である。「地の底に人声たつ」とする耳の知覚とは対照に、「燥き白ける街路」に位置を占める自身の足場と視界に映る「はてしなし」とされる眺めである。ここには耳と目の感覚、知覚の上に裂け目が存在していて、それが周三内面の現実感上の裂け目を暗示するところになっっているのである。

周三短歌の出発の時期は、戦争の時代、言論、思想への国家の強制の時代であつて、そうした時代状況が、周三短歌に現実の露呈を抑制する力として作用したのである。荻三先生とポトナム先輩同人の目指す現実主義的新抒情主義は、現実そのもの(素材)を歌にするのではなく、現実から受けた感動(現実感)を生き生きとした抒情で表現することであつて、それは象徴表現として結晶しなければならぬとする作歌理念であつたのである。「燈の沁みし眼」の上に「真近き闇にはためく日の丸」をとらえた作品は、

身をめぐる光すこやけく朝を居るにラチオの放つ軍歌聞き難し

の歌のような現実のほぼ素材そのままの歌とはくらべようもなく、深い現実批判を具象的なイメージによって描いた作になっっているのである。

妻の眼のさしくむ見れば既にして若葉となりし外面の光
 撃剣の音ひびきくるに説き聞かす我の声音の消えむとするか
 幼児の指さし問へば秋陽澄む御国の空や花のくれなる

前二首は昭和一六年、あと一首は一九年の作である。前記『微粒』以前」の中に、この頃のことについての周三の説明がある。

昭和十五年の暮から、十六年の春へかけて、私にとつて大きな出来事がつづいた。その一つは結婚であつた。結婚は私の肉体的にも精神的にも暗かつた青春に、一つの終止符をうつつた。その後、「家」の制度の中で、我々は決して坦々たる道を歩むことはできなかつたが、お互いの努力は新しい倫理を貫徹することができた。もう一つは、ポトナムの同人に推挙されたことであつた。

「妻の眼」の涙に「外面の光」を眺める周三の眼のやさしさが印象的である。「家」制度の中で、結婚生活には時に険相の影が落ちることがあつたと告げてはいるのであるが、「外面の光」に向かつて若い夫婦の絆はより純度の高い「倫理」へと導かれてゆく方向が暗示されるのである。「妻の眼」に向き合つた夫の眼、「若葉」の光に象徴される光景は、二人の内面の個的風景をこえて普遍的な人間風景を示して爽快である。

周三は荻三先生を歌の師とすると共に、師の講壇下に通学して夜間の大学を修了し、京都市役所を退職して、同大学に付設する中学校の教員生活に就いたのであつた。「撃剣の音」は校庭で行われている学徒への軍事教練の音であつて、この歌の次に、

教員の前にて規律正しかることなど日本人の美点にあらず

が置かれ、「撃剣の音」に「説き聞かす我の声音」のかき消される弱さを弱さとして投げ出す心裡にも、持している激しい情熱の存することを示しているのである。

若い夫婦の間に長女が誕生（一七年）、次いで長男が生まれる（一九年）。「幼児の指さ」す先には「秋陽澄む」空が「花のくれなる」の色にひるがっていたというのである。この一首を眺めて気付くことは、秋陽の空を「御国の空や」と表現したことであって、街空の真近き間に「日の丸」を眺めた作のあったことを引き寄せれば、「闇にはためく日の丸」のイメージと「花くれなる」に澄み染まる「御国」の秋空の美的感動とが、微妙にズレて感受されるのである。

『微粒』以前に集められた全一二三首には、防空演習、入営、出征兵士、南京陥落、軍事教練など軍国日本への違和感、批判的知性と感情が底流していることは明らかであるが、国民、あるいは家族を擁する人間の現実生活の場所として運命づけられてある「国土」への愛着は、軍国主義とは位置をズラしたところに存在することもまた自然であるだろう。イデオロギーに固執しない一人の人間感情が「幼児」を抱くがごとく湧出した光景と眺めてよいはずである。周三短歌の戦時下の様相を以上に素描してみた。

微熱ある身に風徹る 戦後派歌人として

昭和一九年、「ポトナム」は雑誌統合の国策によって「アララギ」と合併したのであったが、敗戦後、誌名を「くさぶぢ」として出発した。二二年一月に創刊号を出して、周三はこれに五首の作品を発表している。

る。

学問を学問として建てざりしその果てにして亡びたらずや
蘇聯の学芸による熱意をぞ羨しく思ひし戦へる時も
人類の至高の業にいそむと疑はぬ日を餓えまさりつつ
老い母の嘆き給ふにいらへつつ安らげき日を近しと言はず
学問を恋ふることなき人々はあはれみにけりわれが疲れを

昭和一〇年二月、貴族院での美濃部達吉博士の憲法学説への攻撃にはじまる、軍部の学問全体に対する強迫政治は学問の「日本化」の強制となつて現われたのである。小泉荃三博士とも親交のあった京大教授高田保馬博士の専門分野でも「日本的な社会学を作れ」という時代迎合学者からの攻撃を受け、高田博士は「日本的学問とは何ぞや」を書いて反論したのであった。

例へば、日本人の身体は、それに特有である。この特有の対象があるから、生理学や病理学や、遺伝学などが日本特有のものとしてきつき上げらるるであらうか。

「学問の民族性の誤れる高調」は、学問の階級性の強調と同様に有害であると切つて捨てたのである。高田博士の警告は昭和一年のことだ、その予言はずばりの中したのである。「学問」は「学問」として建てねばならぬ、周三の洞察は長い暗黒政治下に実感してきたところであつて、敗戦の真因を衝くものであつたのである。その愚はくり返されてはならぬ。「蘇聯の学芸」に対する憧憬はソビエト解体後の現代から批判されるべきではない。青年時代にエンゲルスの「空想より科学へ」、マルク

「スの「賃労働と資本」などを読んで、暗黒政治時代の向こうに理想的社会を憧憬した周三の夢が、敗戦日本の社会再生のビジョンとして描かれたものである。周三の敗戦日本への感慨が「学問を学問として建て、ことにあったのは、その後のこの人の学者としての誠実と、それ故にこそその受苦の出發になったことを注目しておきたいと思うのである。」

昭和二十二年、師小泉荃三に推されて大学予科教授として研究者の道に入ったのである。周三、この年三三歳になっていた。第一歌集『微粒』（昭三二・七）には昭和二十三年から二十九年に至る作品から三七二首を選んだのである。後に周三は「神経の傷み」と題して、この歌集の背景について明かしている。この七年間は「私個人にとっても、全く不安動揺の時期であつて、しかし、プラス面としては荃三先生から『くささぶち』の編集がまかされていたことであつた。」

マイナス面は職場にあつた。私の勤めていた大学は、戦中派極右的な軍国主義。戦後は一八〇度転回して革新系の急進的な主義になった。私は戦中に持続した抵抗の姿勢を再びとらねばならなくなった。

周三は『微粒』に先立つて、学術本『芥川龍之介』（昭三二・三）を著していたのであるが、職場内で「自殺したような敗北的反動的な作家を研究する和田はダメだ」という声が耳に入ってきたというのである。

集団の中に居らしむる我が個をさぐりて陽のしばらくは落ちぬ
佇つ我に吹かざる風が街上の砂塵を巻きて過ぎゆくを見る
鉄板を打つ音痛し風来れば更にひびかふ樹肌の照りも

「学問を学問として建て」ることのなかったこの国家の敗北は、軍国主義化した集団主義の敗北を意味するとともに、「個」の敗北でもあったのである。集団主義に対峙する個人をどのように再建してゆくか、この国家、社会の前途はこの点にかかつていたのである。前途を複雑にし、暗くしたのは、軍国主義を担いだ集団主義が、敗戦を境に変装して暴走しはじめたことであつた。その中には多くの旧体制を支えた者たちが加わっていたのである。敗戦後、自主的に民主化による新しい大学作りにも努力されていた小泉荃三先生が追い落とされることになった顛末については、小泉先生生誕一〇〇年を記念して、ポトナム短歌会より『小泉荃三全歌集』が刊行（二〇〇四年三月）された時、周三と共に荃三先生の信認のもっとも篤かつた白川静博士が当時の学内事情を詳細に証言されたことによつて、はじめて広く知られることになったのである。

敗戦後間もなく教職者の適格審査が開始されたが、委員会は第三者機関ではなく、学内に設けられた。このような機関を学内に設けることが、そもそも非常識なことであつた。私の学校では、かつての禁衛隊長が、審査委員長に任命された。これが新しい体制による、民主化の第一歩であつた。

「小泉先生の不適格審査について」（『小泉荃三全歌集』 栞）
周三の、軍国日本崩壊の喜びはたちまちのうちに新時代によつて打ちくだかれることになったのである。「我が個」は「集団の中」にいて極めて神経的に鋭く自覚されるの余儀なきに至つた。白川博士の草稿になる「再審査要求書」の連署に加わつた周三に対する風当たりは神経を傷めつけるものであつたのである。それは周三の周囲に潜伏していて、「街上の砂塵を巻き」上げて傍を通過していく有様にも眺められたので

ある。それでも周三の裡に若干の希望は抱かれてあつて、それは「陽のしばらくは落ちぬ」と觀察する目が存していて、その些かの期間に「我が個」の揺らぐことのない実体を探ろうとする意欲が働いていたのであつた。

陽光が諸葉に翳りゆく時し息づき深く身をひるがへす

我を容れぬ人等の声をあかときの夢より覚めて更にたしかむ

心占むる英雄といふを持たざりき少年の日の思へば今も

文字の上に薄ら陽させばあたたかきこの世のものを一時思ふ

貶さんとたくらむ者の声たち来日毎の道の暗きにも又

「英雄」は集団主義の象徴であつて、周三の強く違和を感じるころである。右の英雄に代えるに左の英雄をもつてする。それは真理の学徒としての研究者の最も強く拒否すべきものである。それであるが故に周三の神経は、時代の「陽光」の翳りゆく一時、しかも局限された場所においてしか「息づく」ことの許されぬものであつて、そうした周三の神経の安らぎはまた「文字の上」に限定されてあつたのである。

『微粒』のために序文を与えた師小泉蒼三は次のように書いている。

和田君は体温が一分か二分上下してもすぐ自覚するといふことであつた。私はびつくりしてしまつた。一分か二分といへば一度の十分一か十分二である。私などは体温計にたよつて一度二度といふ体温の上下を知るのである。それにくらべると和田君の感覚はまことに微妙なものがあるといへよう。

周三短歌の研ぎ澄まされた感覚の由来するところをよく知つた師ならで

はの指摘であり、ここに近代短歌の完成を超えた現代短歌の出現を喜んでいるのである。弟子に与えた序文の、これが最後になつた。蒼三先生はこの四ヶ月後の一月二十七日、急逝されたのである。ところで周三の歌には、感情の極度に沸騰する歌もないし、逆に冷却そのものの感情もない。

暴力を否定しきたりし我が内のうす蒼きもの更にあえかに

光浴びし我の姿をいくたびかウインドウに見て疲れゆきたる

脱毛の少くなりし日頃ぞと社会的ならぬ喜び一つ

絶対に結核ならずと告げらるる喜びも淡くなべて衰ふ

壁面の汚れに馬のかたち見ゆ戦車見ゆ思ひつるなる眼に

昭和二五年、一九五〇年はこの国の転換の年である。マッカーサー指令によるレッド・パージ旋風、朝鮮戦争、警察予備隊の発足と軍靴が戻つてきたのである。戦争期に暴威をふるつた右の全体主義、集団主義は、その圧力の下に左の全体主義、集団主義を育てていたのである。敗戦日本の数年間の平和は、周三短歌の「墓場の平安と思へ空の蒼もいまは消えゆく薨の果てに」と觀察された通りであつたのである。全体主義、集団主義は個人性に対する憎悪という点において共通しているのである。周三が芥川をテーマとした研究書を著したことへの中傷の言は如上のことを証明して余りあることと言わねばならぬ。敗戦後間もない頃、周三短歌に歌われたソビエトの学芸への憧憬はたちまちのうちに雲散したのであつたが、それが周辺の動きによつてもたらされたと認められた折りの、周三の胸中を貫いた痛みを想像する術をばくは持たぬ。

亡命も隠遁も億劫なるものならむきざしくる熱に眼をあけて居る

我が心病みては居らず明暮をたくらむ如き人の眼にあふ
 渡らねばならぬ橋よと息つめて微熱ある身に風徹る音

「我が心病みては居らず」と自分に言い聞かせる周三は、真実「心病みて」いたのである。軍靴が去り、そうして今度は右と左の「冷戦」が世情を覆う時代が到来したのである。集団は周三の現実であって、「亡命」や「隠遁」が希望する想念ではあっても堪え続けなければならぬ。「集団の中」「己」「個をささぐ」る周三にとって「微熱」は心の病の発症であって、同時に、冷淡にも親昵にも傾斜せず、現実の不条理の前に踏みとどまって、自身と人間の真相を見極めようとする時の有力な「武器」の象徴であったのである。この意味で、和田周三の第一歌集『微粒』は戦後派歌人の出現を告げる歌集となったのである。

(本学文学部教授)